FAITH

アフリカ便り

ムヒンビリー メディカル・センター

渡辺　政直

元日本聖公会首座主教。1986年に退職後、「再度、現場の第一線に戻り、人々への奉仕活動の道を歩みたい」という希望のもと、1987年7月、夫人とともにタンザニアのダルエスサラームに渡る。当地において、貧しい人々や、同港にある"THE MISSION TO SEAMEN"という船員のための休養施設で奉仕活動を行う傍ら、タンザニア各地の英国教会（THE ANGLICAN CHURCH）でも奉仕活動を続けている。夫人は看護婦の資格を生かし、医療奉仕活動をしている。

国土が日本の2倍半、人口2635万人のタンザニア共和国にある唯一の国立総合病院がダルエスサラーム市にある「ムヒンビリー・メディカル・センター」である。医師の多くはダルエスサラーム大学医学部出身で、看護婦数は500ないし600名、病床数は2000を越える大病院だ。病気治療にお金がかかることは当然のことだが、このセンターは全てのタンザニア人の保健と福祉を願い、「無料」を大前提として掲げている。確かに素晴らしいことだ。でもこの大目標遂行のための裏方の苦労は並大抵ではない。薬品の確保、医療器具の設備、運営費、人件費、営繕費等々必要経費は尽きることがない。私立の病院もある。でも有料だから利用者は自ら限定される。

さて、このセンターに入院できる者は国内各地に散在する公営の診療所（警察、国鉄、港湾、電力、軍関係、銀行等々のクリニック）又は宗教団体経営の診療所で診察を受け、センターでの治療を必要とするとの診断書を受けなくてはならない。どこのクリニックも病人で満員だ。マラリア、結核、肺炎、腸チフス、コレラ、脳膜炎、皮膚疾患、高血圧、心臓疾患、腎臓疾患、そしてエイズ等々、さまざまな病気に苦しむ人が診察を求めて殺到する。その中からセンター行きを指示された患者は国内全土からダルエスサラームに集まる。センターの病棟内の病室（ウォード）におよそ20のベッドがある。でも患者数が多くなるとベッドは勿論のこと、床の上にも収容され、更に患者の身寄り、見舞い客等の出入りで足の踏み場もない状態になる。医師の絶対数に比べて、入院患者数はるかに多く、診察や治療も十分にゆき届かないのが現状と思う。患者への投薬も、建前として医薬分業になっているので、特殊な薬品は医師の処方箋で市内の薬局で入手しなくてはならない。高価の故に入手できず病状悪化を招くケースも多い。

ひるがえって日本のことを考えると、全国どこの市町村にも整った病院がある。医師、看護婦、医療器具、医薬品、治療、看護、救急態勢、健康保健等々、いずれをとっても恵まれている。しみじみ「有り難いことだ」と思う。こうした医療全般にわたって万全の備えをもつ日本は世界一幸せな国だと言っても過言ではあるまい。ただ、この事実にハッと気付いたのは恥ずかしいことだが自分自身が国外、殊に東アフリカに来て初めてのことである。日本にいた時はごく当たり前のことと受け止めていた。

17世紀のオランダの画家、レンブラントは影を描く画家と言われている。筆法は暗い部分を見逃すことなく丹念に描いてゆく。その中に光りの部分が見事に浮き出てくる。ただ絵画の影と光りは描かれたまま動きがない。しかし、今我々の住むこの地球は動いている。現在さまざまな事情で影に覆われている国々に、一日も早く光があたることを願ってやまない。

そのために、今光の中にある国の人々が世界のどこかに影のあることに気付き、そしてなんらかの行動に結び付くようであれば、どんなに幸いなことであろうか。

お知らせ

バイオサナトロジー（生死の哲学）学会に学際的な英知をお寄せ下さい

会長／土屋健三郎・前産業医科大学学長

副会長／師岡孝次・東海大学教授、山折哲雄・国際日本文化研究センター教授

評議員／青木　清・上智大学生命科学研究所所長、植松　正・日本尊厳死協会会長、岡田節人・国際生物科学連合副総裁、河野友信・（財）パブリックヘルスリサーチセンターストレス科学研究所副所長、隅　寛二・死の臨床研究会埋事、田宮　仁・ビハーラの会世話人代表、古川泰龍・シュバイツァー寺代表、八木誠一・桐蔭学園横浜大学教授、他。

《資料請求先／事務局》

〒104 東京都中央区銀座4-5-1　聖書館ビル303　財団法人　生存科学研究所内　バイオサナトロジー学会事務局